
超最終兵器魔法少女サド！

雨霧ユウ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

超最終兵器魔法少女サド！

【Nコード】

N7232J

【作者名】

雨霧ユウ

【あらすじ】

近來の主人公。

・ザ・鈍感

・「不幸だ……」

・平和・平凡を愛する

今回の主人公。

・ザ・敏感

・「ムツツリだ……」
・ロリータ・妹系を愛する

上記の要素を作者の願望から受け継いでいる主人公である俺、三倉憂はある日、自称「超未来からきちゃった魔法少女です」ことサディストⅡΩ・ララヴィシュトウンと、ちょべりぐ運命的なナウい出会いをする。

しかも紅髪ツイン・ロリータ・怒S。

身体中から機関銃やら端子カッター・拡散波動砲・チエーンソー
etc.。

わつつ？ え？ あなた魔女っ娘ですよ？

——そうしつこいですが自称「カードキャプター×××やりリカル○○○をはるかに超えた未来型魔法少女」であるサドは、文字通りどっかの青狸さんよりも遠い未来からうっかりきちゃった最終兵器だった。

生粋の現代人である俺の人生は？ 貞操は？ 初体験はどうなる？

夢見る思春期の男子よ乞うご期待！

製作・「歳葉高校映画研究会」この会社は自然とロリータにやさしい材質でござる」

監督・雨霧ユウ

プロデューサー・ムスカ

声優・皆様の脳にお任せします

協力・海馬コーポレーション

ブooooooooooooーゲ！（前書き）

字が詰まっておりますので、縦書きで読まれることを推奨します。

ブooooooooooooーグ！

あれ——？ 俺死ぬんじゃない？

唐突かつ冷静にそう思った。

体は重力に引かれ、高さ三〇階の高層ビルから真つ逆様に落ちていく。途中、まさか人が飛び下りたとは知らずに、オフィス内の会社員たちはいつもと変わらないであろう忙しい仕事に追われていた。ああそうだ。普段の日常から外れているのは俺の方だ。しかも一番最悪な方向へと。

体の向きが変わり、風圧が胸板を正面から叩きつける。見開かれた震える眼球に映るのは、玄関前のコンクリート。

……さすがにノーロープバンジーはキツイだろ。意外と俺は窮地に立たされても冷静を保てるらしい。

地上との距離約二〇メートル。死との距離、右と同意。……借りた小説返せそうにないな。悪い。

再び体が回転。頭部が下を向く。頭蓋骨粉碎まで距離約一〇メートル。絶命との距離、右と同 義。……結局、童貞のままだったか。切ないな。

思考がぼやけてきた。いまさらながら慟哭を覚え、脳が麻痺してきたのだろ。それでも構わない。

黄泉の国との距離約五メートル。永眠までの距離——残り一メートル。

ふと、視界がスローになる。たしか人は死と直面したとき、脳が助かる方法を考える、それがスローの正体だって誰かが言ってたな。けどこの状況からして俺が助かる確率は零。死の匂いだ。悲しくないなんて言ったら嘘になってしま。う。できればまだ生きたい——けれどもその願いは叶わないだろう。

さようなら。

……………ん？

痛みがこない。深淵へと誘う死の痛みがこない。おかしい、頭部が砕けるどころかふわりといつまでも宙に浮いているみたいだ。

恐る恐る再び瞼を開く。弱い光が射し込んできたと思えば、そこにあったのはなんと、視界いっぱい群青。

「わつつ……？」

我ながら情けない第一声だと思う。だが、いきなりこのような満面の蒼空を見せられれば、平静など保てないだろう。いやいまは情けない云々の場合ではない。

航空機が飛び交う大空。問題はなぜ俺みたいな凡才と秀才を足して二分の一を掛けたような奴がここにいるかだ。言うまでもないが俺は極普通の高校生であって（童貞）ちょべりぐりリカルな魔法使いでも、幻想を破壊しますよが売りの烏頭少年でもない。しかも待て、さっきまで地上スレスレな位置でパラシュートなしの低空スカイダイビングを文字通り命懸けでやってたじゃないか。まさかここが天国というなのエデンなのか？ ならば断固抗議しよう。不景気で魑魅魍魎とした現世とは一八〇度違うと云われる、苦のない楽園が……なんでこんな虚無的なんだよ。

「ちよつとあんた起きてるんでしょ？」

我が底のない慟哭に惹かれてきたのか、浮遊霊の幻聴が聞こえてきたさ。

「おーい、ちよつと？」

む、まだ帰らないのかしつこい奴だな。さぞ生前は五月蠅い悪ガキだったんだろうな。

「気づいてんでしょ？ は、もしかして無視してんの？」

御名答。察したなら空気読んで帰ってよ！ あたいのことはもうほつといて！

「……………ねえ？」

粘り強いよねえ、納豆かこいつ。

——ん？ 待て今世紀最期の天才。もしや娘奴、俺のことが好きなんじゃないか？ ありえる話だ。全身全霊で抑えてもなお溢れ出

る甘美なる俺の魅力に一目惚れ——ありえるありえる。いや、必然だ！

初めての彼女が幽霊——うんマンドム。いままでの独り身な一六年間はこのための対価だったと言っても過言ではない。

……よし、彼女の気持ちに応えてやるとしよう。噛まないように気をつけなきゃな。『お買い上げありがとうございます。ございます。プリーズです』って言うぞ。せーの……

「この豚野郎」

「おきゃい……はい」

噛んだ。豪快に噛んだ。待って、豚野郎って何。幽霊界で流行りの愛情表現？

今気づいたが、彼女の顔がすごい近くにある。

ふつくと柔らかかそうな桜色の花弁もとい唇。細い鼻梁。勝ち気な吊り眼。その奥の瞳は燃え盛る紅蓮色。それらのパーツを収めている小顔。恋愛経験などに乏しい俺でもわかるほどの美少女だ。

ふと、視線をずらしてみると炎髪ツインテイルが映った。不覚にも俺の萌え萌えメーターが急激に湧き上がる。

「やっと口利いたわね。あと一秒遅かったらこっから落としてたところよ」

「はい？」

なにを言っているんだろうと思い、下を向いてみると、「世界」があった。

見慣れた景色。歳葉町じゃん。

これで完全にわかった。今俺は遙か上空に浮かんでいる。

……で、ええええええっ！

だからなんで浮かんでんだよ！

いまさらながら気づいたんだが、俺はこの少女に抱えられている。なんつう怪力だ。

戸惑いながら少女の方向を向いてみると、少女の背中にあっけはいけないものがあった。

いかつい機械の翼。

人智を越える存在。

人外。

はあ……もう驚き疲れた。

投げやり気味に彼女に尋ねる。

「お前はなにもんだ？」

すると当の彼女は、強気に唇を歪めると、こう言ってきた。

「——魔法少女よ」

そう——これは、斜め四五度から見事俺のくだらない世界を壊しやがった、もとい壊してくれた機械少女とつまらない一般人の物語だ。

プロローグ了

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7232j/>

超最終兵器魔法少女サド！

2010年10月10日19時55分発行